慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	学習指導要領改訂に伴う武道の単元計画の検討 : 剣道における「形」指導上の留意点を中心に
Sub Title	Study of budo unit programs in accordance with the revised course of study : in terms of the kata teaching methods for kendo
Author	吉田, 泰将(Yoshida, Yasumasa)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1991
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.31, No.1 (1991. 12) ,p.31- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00310001-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学習指導要領改訂に伴う武道の単元計画の検討

——剣道における「形」指導上の留意点を中心に——

吉　田　泰　将*

Ⅰ．は　じ　め　に
Ⅱ．武道に関わる改訂の要旨
Ⅲ．日本剣道形の意味と効用
Ⅳ．単元の中における「形」の取り扱い
Ⅴ．日本剣道形指導上の留意点
Ⅵ．ま　と　め

Ⅰ．は　じ　め　に

「形（かた）」の持つ意味は広辞苑[8]によると，①伝統・習慣として決まった形式，②武道・芸能・スポーツなどで規範となる方式というもの，と書かれている。

また新修体育大辞典[2]によると，柔道では，形を練習の一形式として捉え「無数とも言える攻防の手段の中から，目的に従って，あるいは理論的・実際的に代表的価値があると思われるものを選んで，それぞれの種類の形の組み立て，それによって技の理論と方法を教えるものである。」とし，今日では講道館の形を中心に指導が行われている。剣道においては，「技を正しく習うための基礎となる太刀の原理的な使い方。先人の研究・工夫した技法が凝縮されているもので，攻防の法則となる一定の手筋の始まりから順序次第を経て必勝の結果に至る太刀の使い方を仕組んだ，剣道練習の約束的方式。」として全日本剣道連盟の日本剣道形を中心に指導がなされている。また，弓道では基本射法が（足踏みに始まり離れ，残身，弓倒しまで）形として練習されている。その他の武道の種目においても「形」が基本的な技能の習得手段として実施され，「形」そのものの評価を行う試合等が実施されている種目も見られる。

しかし，学校武道の中でその大部分を占める柔道・剣道においては，練習の一部というよりも昇段審査の際に課せられる課目として，また儀式の際の演武のために練習するという傾向に

＊ 慶應義塾大学体育研究所助手

あり「形」本来の持つ意義を真剣に考え練習・実施していないのが現状のように思われる。[(1)(6)] それは「形」の内容が，スピードや場面設定において実戦性に欠ける点にあるのではないだろうか。[(7)]

また，剣道に関する研究の中で，「形」の具体的な実施方法については取り上げられているが，学校体育の教材として捉え言及したものはほとんど見られない。

そこで，ここでは剣道における「日本剣道形」（以下，形と略記する）を取り上げ「形」の持つ本来の意味，効用を明かにし，今回の学習指導要領の改訂に伴い「形」をどのように取り扱って行けばよいのか，具体的にどのような方法で取り入れて行くべきなのかという問題について考察する。

Ⅱ．武道に関わる改訂の要旨

今回の学習指導要領の改訂（平成3年4月施行）では，まず「国際理解を深め，わが国の文化と伝統を尊重する態度を重視すること。」が強調され，従来の格技が「武道」と名称を変え，わが国の歴史と伝統のもとに培われてきた「武道」の適切な指導を期待していることが挙げられる。これは，武道に内在する優れた内容を学習指導の中で生かして行こうとするものであろう。[(9)]

本文中に明記してある武道に対して期待する内容を要約すると次のとおりである。

①「道」の考え方（厳格な形式とそれに対する自己制御），人格（人間）形成を目指す教育法として活用する。

②武道で重視されるマナー・態度・人格を認めあう心を育成する。

③「伝統的な行動の仕方に留意して…」正しい，丁寧な「礼」を身に付けさせる。

④学習の主体である生徒の個性・自主性を生かし，能力，興味，関心に応じた学習過程を作り，「生涯武道」を目指す。

そして，これらのことを実現する上で，技の基本を理解し，伝統的な行動の仕方を体得させるのに有効な「形」を取り入れることを考える必要がある。中学校指導書・保健体育編（文部省）でも，柔道及び剣道の内容として「対人的技能の指導に関連して形の取り扱いを工夫することも有効である」と明示している。

このように，武道の持つ特性を生かしていくために「形」の持つ意味・効用を再認識してどう取り扱っていくのか，検討する必要がある。

Ⅲ. 日本剣道形の意味と効用

全日本剣道連盟の剣道の理念では，「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とし，刀の合理的な操作を身につけ，人間を尊重していく心を養うことを第一義としている。この理念からも「形」に求められることがらが推測できるであろう。

これまでの日本剣道形制定に至る経緯から「形」の意味を考えてみると，明治四十四年に改正中学校令施行規則が発布され，剣道が正課教材に加えられると，大小合わせて十本の組太刀の剣道形が制定されその基盤ができた。この時，諸流派統合の象徴としての意味合いと竹刀剣道中心で乱れた手の内と体さばき，刃筋を無視した打突などを矯正するための補助教材としてのねらいが込められていたと伝えられている。その後，大正元年大日本帝国剣道形としてまとめあげられた。その時の主査の一人高野佐三郎は，著書「剣道」(10)の中で教材としての剣道形について次のように述べている。「剣道の形は剣道の技術中最も基本的なものを選みて組み立てたるものにして，之によりて姿勢を正確にし，眼を明らかにし，技癖を去り，太刀筋を正しくし，動作を機敏軽捷にし，刺撃を正確にし，間合を知り，気位を高め，気合を練る等甚だ重要なるものなり。初めより道具を着け互格の試合を試み勝負を争ふ時は姿勢・動作を乱し気合間合を測らず刺撃も正確ならずして多く悪癖を生じ上達亦遅し。故に昔は必ず先ず形より入りて試合に到るを順序とせり。」同様の内容の記述が多くの指導書に見られる。

このように，剣道形を竹刀剣道の導入の教材として取り扱うことが主流であったと思われる。その後，第二次世界大戦後剣道の禁止，復活と経過し，学校体育にも採用されたが，剣道形は武器，刀剣のイメージから教材からはずされていたのである。

したがって今回の改訂にあたり，剣道形を取り入れる意義，効果を考えた場合，積極的に取り扱って行く方向で考えていく必要がある。

そこで，これまでに出版されている代表的な剣道指導書の日本剣道形に関する記述から，(3)(4)(5)(10)(11)教材として取り扱った場合の効果についてまとめてみると，

①礼法や正しい姿勢を理解させ易い（日常化）。

②対人的関係（間合・位置・残心など）を把握させ易い。

③竹刀と木刀の違いにより握り方や刃筋の立て方（平打ち）など正しい振り方を理解させ易い。

④気のつながりや攻め合いの感覚，意識を体験させることができる。

⑤木刀の使用により，刀法への接近が図られ緊張感，緊迫感を体験させることができる。

⑥危険性を理解させ，安全に対する意識や相手を尊重する心を培う。

⑦相手の動作に対応する技の内容や体さばきを理解させ易い。

などが考えられる。

このように，形の指導を通して予め身につけておくと，その後の竹刀による基本的な動作や対人的な動作を理解しやすいものと思われる。

Ⅳ. 単元の中における取り扱い

まず，武道の単元がどの程度のボリュームで実施できるのか，具体的に示してある中学校の場合（表1）を例に見てみると，武道に純粋に当てられる時間は14～40時間前後と幅をもたせてある。武道を専門として指導できる教員がいる場合は多くの時間を割り当てて，かなり深い内容まで進んで行くことが可能となっている。

表1　授業時間の配分（例）中学校指導書・保健体育編・文部省

学　　年	1	2	3
総授業時数	1,050	1,050	1,050
保健体育 （体育分野）	105 (95)	105 (95)	105～140 (70～105)
武道の授業配分 （率）	15～35%	45～65% （武道・球技）	50～70% （武道・球技）
武道の授業時数	14～33	24～43	70時間の場合 14～28 105時間の場合 21～42

そこで，実際の授業の中で考えられる具体的な取り入れ方を授業形態別にまとめてみると，次のようになる。(9)

①一斉指導（表2, 3は便宜的に全体を15時間で示してある。）

単元の時間数が多い場合には，その時間数の最初から3から5時間を剣道形の指導に当てるタイプ（表2）と基本練習に当てる時間の中に数回に分けて組み込んで行くタイプ（表3）の二つが考えられる。

前者の場合，その時間内で教授できる範囲の数本の形を抽出して流れを意識した指導が可能になる。また後者の場合基本的な技の練習の内容に合わせて，陥り易い欠点を矯正するために利用しようとするものである。

②グループ学習

学習させる内容の中に予め何本かの形を組み込んで，学習者の計画に従って適宜形の効用を

表2　最初にまとめて「形」を実施するタイプ（例）

段　階	導　入	展　開	整　理
時　数	1　2　3　4　5	6　7　8　9　10　11　12	13　14　15
内　容	基本動作 日本剣道形	対人的技能 （互格練習を含む）	試　合

表3　段階に応じて「形」を実施するタイプ（例）

段　階	導　入	展　開			整　理
時　数	1　2　3	4　5　6　7　8	9　10　11	12	13　14　15
内　容	基本動作	対人的技能（互格練習を含む） 日本剣道形	日本剣道形	日本剣道形	試　合

理解させながら指導して行く。この場合，経験者を活用してグループ内の核を作ると効果が大きくなるであろう。

③男女共習授業

これからは施設・用具などの条件が整えば，選択制で女子も武道を履修することも可能になる。その場合，剣道において形を取り入れると体力差（筋力，体格など），性差をさほど考慮しないで同じ内容の指導が可能となる。

また，これらの授業形態の中で適宜個別指導が行われていくわけだが，その際にはなるべく生徒と太刀を交えて同一の気でつながった空間を体感できるよう心がけるとより効果が期待できるであろう。

V. 日本剣道形指導上の留意点

このような授業形態で剣道形を指導して行く場合，考慮しなければならない点がいくつかある。

まず用具については，竹刀でなく木刀を使用させることが望ましい。しかし厳重に管理しておかないと心ない生徒により事故が起きかねないので注意が必要である。

また，服装に関しても伝統的文化に触れる意味で，稽古着・袴の着用が望ましい。

ここで，技術面の留意点をまとめると，

①自然体を理解させ，より美しい姿勢[(4)(5)(6)(9)(10)(11)]・構えを意識して行わせる。

②五つの構えを正しくとれるように指導する（注：五つの構えとは五行の構えとも呼ばれ，剣道の基本となる構え方を指す。具体的には，上段の構え・中段の構え・下段の 構え・八相の構え・脇構えのことである。）

③細かいことにとらわれず大きく伸びやかに打たせる。但し次のポイントはおさえておくこと。

- 両拳が正中線からはずれない（構え，打突の前後）。
- 正しい部位を正確に打たせる（目標から離れ過ぎない）。
- 肩や手首を柔らかく使い，大きく振り切るよう心がける。
- 体の運用，特に前後の足さばきはすり足で行い，バランスを崩したり上下動が大きくならないようにする。
- 残心はゆっくりととり，決して間と気が抜けぬようにする。

④呼吸に意識を持たせ，腹から長い息づかいで行わせる。

以上の事柄が挙げられる。

VI. ま　と　め

ここまで剣道における「形」を取り上げ「形」の持つ本来の意味，効用を明かにし，今回の学習指導要領の改訂に伴い「形」をどのように取り扱って行けばよいのか，具体的にどのような方法で取り入れて行くべきなのか考えてきた。

武道と名称をかえ，各学校の自由裁量によって時間数も決定できる今日，武道に求められている内容を多くの生徒に理解させ，身につけさせるために，また剣道自体に対する興味を持たせるために，学校剣道の指導場面において積極的に「形」を取り扱って行くことが大切であ

る。

そのためには指導者自身が「形」の重要性を認識し，自分自身の基本・初心にかえるために，それぞれの立場で「形」そのものを見直し，研究し，活用して行く努力が必要であろう。また「形」を考える時，その手順や形式のみに拘るのでなく，その「形」に含まれる技の内容，心と心のふれ合い（気のつながり）を中心に，全体的な大きな流れを体験させるような指導を心がけていくことを提唱したい。

＜引用・参考文献＞

(1) 浅見俊雄ほか編：現代体育スポーツ大系，剣道，22巻，108～109，1984。
(2) 今村嘉雄ほか編：新修体育大辞典，不昧堂出版，271・274，1976。
(3) 三橋秀三：学校剣道，新体育社，203～231, 1954。
(4) 三橋秀三：剣道，大修館書店，339～368, 1972。
(5) 中野八十二ほか：現代剣道講座，第1巻，百泉図書，155～159, 1971。
(6) 作道正夫：剣道形は面白い，月刊剣道日本1月～9月号，スキージャーナル，1989。
(7) 重岡昇監修：特集日本剣道形と現代剣道，月刊剣道日本9月号，スキージャーナル，1979。
(8) 新村出ほか編：広辞苑，岩波書店，416，二版補訂，1976。
(9) 杉山重利監修：学校武道へのアプローチ，月刊武道4月～8月号，日本武道館，1991。
(10) 高野佐三郎：剣道，剣道発行所，68～80, 1915。
(11) 坪井三郎：現代スポーツコーチ実践講座19剣道，ぎょうせい，347～361, 1985。